

令和 2 年 6 月 21 日現在

機関番号：37111

研究種目：基盤研究(C) (特設分野研究)

研究期間：2016～2019

課題番号：16KT0154

研究課題名(和文) 社会的紛争における暴力誘発装置としての集団：“集団心理”の実証的検討

研究課題名(英文) The group as a violence-inducing device in social conflict

研究代表者

縄田 健悟 (Nawata, Kengo)

福岡大学・人文学部・准教授

研究者番号：30631361

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、暴力を生み出す“集団心理”を実証的に解明することであった。本来暴力を嫌っている人間が、ある場面で暴力を振るうようになるのは一体なぜなのだろうか。本研究が着目したのは暴力誘発装置としての集団の役割である。集団暴行、集団非行、暴動、いじめ、民族紛争とジェノサイドなど、多くの暴力行動は集団で行われる。本研究では、これらの個別テーマの研究の中で散発的に触れられてきた集団が持つ暴力性に対して、集団過程という視点からの統合的理解を試みてきた。本課題期間の中では、集団暴力と集団間紛争に関する書籍の執筆と論文執筆を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

暴力・差別・社会的分断は、現代社会において克服すべき最重要テーマの1つである。日本国内でもヘイトスピーチは広まり、外国人への差別と排外主義は大きな問題となっている。本課題は、暴力を誘発する装置としての集団という観点から、人間の暴力性を理解しようとする点で、高い学術的意義と社会的意義を有している。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to investigate empirically the "group mind" that elicits violence. Why do people who inherently dislike violence become violent in certain situations? This study has focused on the role of "group" as violence-inducing devices. Many violent behaviors, such as mass assault, mass delinquency, riots, bullying, ethnic conflicts and genocide, are group-based. In this study, I have been trying to understand the violent nature of the groups that have been examined from the perspective of group processes. During the term of this project, I have written books and articles on group violence and intergroup conflict.

研究分野：社会心理学

キーワード：集団暴力 集団間紛争

1. 研究開始当初の背景

社会的紛争が重大な問題である最大の理由は、暴力が用いられることで被害者が生まれることである。つまり、紛争研究とは暴力研究に他ならないともいえる。心理学では攻撃は身体的攻撃と関係的攻撃に二分されるが、ここでいう暴力とは前者の身体的攻撃を指す。人間が暴力行為を行う社会・心理的要因の解明は、紛争研究における最重要課題の一つである。

当然ながら、人間は暴力を好んでいるわけではない。むしろ人間の道徳心の根幹には、他者への危害を忌避する心理が存在し (Haidt, 2012)、多くの研究が、他者への暴力に対して強い嫌悪感と精神的苦痛を覚えることを示してきた (Cushman et al., 2012; Grossman, 1996)。その一方で、現実の紛争場面は暴力に溢れている。したがって、紛争研究で理解すべき問いとは、「本来暴力を嫌っている人間が、ある場面で暴力を振るうようになるのは一体なぜか」である。

本研究が着目したのは暴力誘発装置としての集団の役割である。過激な暴力を考えたときに、人が一人で暴力を振るうことは実は少ない。集団暴行、集団非行、暴動、いじめ、民族紛争におけるジェノサイドなど、多くの暴力行動は集団で行われる。本研究では、個人では忌避される暴力が、ためらいなく行われるように変容させる集団における社会・心理過程の解明へと取り組む。これによって、これまでは「ジェノサイドの政治過程」、「少年集団による非行」、「ワールドカップでのフーリガン」などの個別テーマの研究の中で散発的に触れられてきた集団が持つ暴力性に対して、集団過程という視点からの統合的理解を試みる。

このような集団が暴徒となる現象は“集団心理”や“群集心理”と一般には呼ばれてきた。しかし、この“集団心理”は標準的な心理学の学術用語ではなく、実は心理学ではあまり扱われてこなかった。その背景には、心理学の研究手法上の制約が挙げられるだろう。心理学では、一般人を対象とした実験室実験やアンケート調査によって、人間の一般的傾向を統計的に解明するという手法を中心に研究が勧められていた。これは攻撃研究でも同様であり、平和な一般の学生を対象とした攻撃性のアンケート調査や、相手に与えたノイズ音の強さや否定的評価の大きさを攻撃の指標とした実験室実験が心理学研究では行われてきた。しかし、このような手法では、集団暴行、群集暴動、民族紛争などのリアルな暴力心理の理解には乖離が大きいだろう。それは心理学者も自覚しており、結果として“集団心理”の発露による暴力的集団現象は、心理学の趨勢の中でほとんど検討されてこなかった。客観性を重視する実証の立場は現在の学問の世界で重要性が益々増している。“集団心理”の実証的理解は、社会的・学術的な価値が非常に高い。

2. 研究の目的

以上の背景を踏まえると、ここまで述べてきたような“暴力的集団心理”へと接近するのは、従来の心理学の手法のみでは不十分であり、心理学の枠を超えた工夫した取り組みが必要となる。本研究では、いかに述べるような多面的な手法を用いて、暴力を生む“集団心理”の理解を試みた。これにより、暴力を生み出す“集団心理”の理論的精緻化を目指した。

3. 研究の方法

本研究では、多面的な検討を行った。大きく3つの成果があるため、それぞれを紹介する。1つが理論枠組みの提示である。2つ目が、SCCS という比較文化データベースを用いた集団間紛争とその先行要因の解明である。3つ目が、新聞記事と統計を用いたアーカイブ分析である。それぞれ方法の詳細も含めて、「4. 研究成果」のところでもまとめて紹介したい。

4. 研究成果

大きく3つの研究成果があるので、それぞれを紹介する。

1つは理論枠組みの提示である。ここでは、まず(1)集団暴力と関わる社会現象の先行研究を整理するとともに、(2)その説明原理となる心理学の集団過程理論の研究を概観し、両者を対応付ける形で、集団暴力の理論的な体系化を目指してきた。

現在、先行研究レビューを重ねてきた。集団暴行、暴動などの集団暴力に関連する社会現象に関する研究を整理するとともに、集団間紛争や没個性化などの暴力を生み出す集団過程に関する心理学研究論文を概観してきた。これまでのレビュー内容に基づき、申請者は集団暴力の理論モデルを提示してきた。(1)暴力を誘発する集団要因として、集団間紛争状況、群集状況と匿名性などがある。これによって、(2a)暴力心理が内面化し、暴力を容認する価値観を持つようになるとともに、(2b)暴力を推奨する外的基準への同調がなされる。その結果、(3)集団暴力が発生するというモデルである。

以上により体系化された集団の暴力性の知見は、単著書籍として執筆しているところである。

専門性のレベルも確保しながら、広く一般への情報提示を目指すことも予定している。また、展望論文としてまとめ、学術論文誌に投稿することも予定している。

2つ目が、データベース分析による集団間紛争における社会文化要因の検証である。本件の成果は、「A glorious warrior in war: Cross-cultural evidence of honor culture, social rewards for warriors, and intergroup conflict」という題目の単著論文として、集団間関係の学術論文誌「Group Processes & Intergroup Relations」に採択され、公表された。

本論文では、人類学分野の前産業社会 186 文化のデータベース(SCCS)を使って、「男らしさの名誉文化 戦士への社会的報酬(特権, 地位, 賞賛) 集団間紛争の頻度」という社会文化レベルのプロセスを実証した。

名誉文化(honor culture, 名誉の文化 culture of honor とも)とは、タフで粗暴で勇敢な"男らしさ"に高い価値を置く文化である。この名誉文化は、個人レベルの対人攻撃性・集団間攻撃性を引き起こすことがかつてより指摘されてきた。それを踏まえて、本研究では、集合レベルのプロセスに着目し、特に戦争を代表とする集団間紛争との関わりはどうなっているのかを実証的に検討した。そのために、「男らしさの名誉文化 戦士への社会的報酬(特権, 地位, 賞賛) 集団間紛争の頻度」という集合レベルの仮説を立てて検証した。

方法として、本研究では、文化人類学分野のデータベースである Standard Cross-Cultural Samples(SCCS; 標準比較文化サンプル)を用いた。これは主に前産業社会を中心とした世界 186 の社会・文化がデータベースとして整理されたものである。人類学者が社会・文化ごとに、集団間紛争の頻度などをスコアリングしている。ただし、欠損も多い。本研究では、今回は、名誉文化 戦士への社会的報酬 集団間紛争の頻度、ならびに統制変数に関する変数を取り上げて、分析に用いた。

本研究では、上記仮説を検証するために、2つの分析を行った。「(1) 他変数を統制した重回帰分析の繰り返しによる媒介分析」と「(2) 欠損値を完全情報最尤推定で行った SEM による間接的影響過程の分析」である。

分析の結果、どちらにおいても、本研究が仮定したとおりの、「男らしさの名誉文化 戦士への社会的報酬(特権, 地位, 賞賛) 集団間紛争の頻度」という集合レベルのプロセスが確認された。

このことから、男らしさの名誉を賞賛する文化は、特に防衛的な暴力を肯定・賞賛するために、戦士たちも賞賛する結果、どうやら実際に集団間紛争を増やすといった社会レベルの影響がある可能性が確認された。

3つ目が、アーカイブデータ分析である。集団暴力の実際を理解すべく、集団暴行事件に関する新聞記事と犯罪統計の分析を行った。

まず、暴行事件に関する新聞記事(朝日新聞社「聞蔵 II」より 1984-2016 年)の約 24000 記事を収集し、そこに含まれる単語を対象に計量テキスト分析を行った。その結果、「集団, グループ, 仲間」といった集団関連語を含む記事では、死亡関連語や残虐関連語の出現率が高かった。このことは、集団が関わる事件では、致死性や残虐性が高いことが示されており、集団による暴力事件の暴力性の高さが示唆された。

また、犯罪白書の統計データを用いて、共犯関係と傷害事件・暴行事件の研究を行った。暴行事件と傷害事件は、傷害事件の方が暴力性が高いことから、単独犯よりも共犯において、さらに集団サイズが高くなるほど、傷害事件の比率が高くなることが予測された。分析の結果、予測は支持された。

以上の2つの研究を1つにまとめる形で、学術論文誌への投稿を予定している。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 Nawata, K.	4. 巻 23
2. 論文標題 A Glorious Warrior in War: Cross-Cultural Evidence of Honor Culture, Social Rewards for Warriors and Intergroup Conflicts.	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Group Processes & Intergroup Relations	6. 最初と最後の頁 598-611
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1177/1368430219838615	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 縄田 健悟	4. 巻 33
2. 論文標題 書評 大淵憲一 (監修) 『紛争・暴力・公正の心理学』 (2016年, 北大路書房)	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 社会心理学研究	6. 最初と最後の頁 34 ~ 34
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.14966/jssp.B009	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Nawata, K., Huang, L., & Yamaguchi, H.	4. 巻 42
2. 論文標題 Anti-Japanese public attitude as conformity to social norm in China: Role of estimated attitude of others and pluralistic ignorance	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 Japanese Journal of Applied Psychology	6. 最初と最後の頁 16-24
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 縄田 健悟	
2. 発表標題 テロリズムの社会心理学の現状と課題 テロリストが過激な暴力に従事する社会心理過程 (大会準備委員会企画シンポジウム (立正大学心理学部公開講座・品川区共催) 「愛と正義と暴力と: 過激主義の社会心理学」)	
3. 学会等名 日本社会心理学会第60回大会 (招待講演)	
4. 発表年 2019年	

1. 発表者名 縄田健悟
2. 発表標題 暴力における集団性の特徴は何か 暴行・傷害・リンチ事件の新聞記事に対する計量テキスト分析による検討
3. 学会等名 日本心理学会第82回大会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 縄田健悟	4. 発行年 2019年
2. 出版社 誠信書房	5. 総ページ数 16
3. 書名 テロリズム発生における社会心理学的メカニズム in 越智啓太(編)テロリズムの心理学	

1. 著者名 縄田健悟	4. 発行年 2019年
2. 出版社 北大路書房	5. 総ページ数 6
3. 書名 集団間感情 in 日本感情心理学会監修「感情心理学ハンドブック」	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------	---------------------------	-----------------------	----